

研究報告

高大連携教育—観察力とコミュニケーション能力を強化する試み—

加藤千恵子¹⁾、石川貴彦²⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科、²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：高大連携、観察力、コミュニケーション能力、健康教育、自己概念

I. はじめに

大学は少子化による大学全入時代と定員割れという事態が現実と言われる厳しい状況にあり¹⁾、その中で、高大連携教育は大学レベルの講義を高校生に提供する目的で行われる。各地域で施行方法は様々である。何回かのシリーズで行われ、修了書を発行する場合や、大学が現役の高校生に対して「科目等履修生」として受け入れ、大学生と同じように、試験やレポートの成績で単位を認定し、その大学に入学後、卒業単位数に組み込むシステムを構築している大学もある。また、「学力低下」を補強するためのリメディアル教育などの学習支援として²⁾ 課題を課し、大学教員が高校で出張講義を行う形態をとる場合もある。例えば、長岡が報告した「大学入試の小論文課題」を題材とした高校教育における小論文教育の有用性から発展させて「高校教養科」設立を提唱するなど、進学の時期的入試科目の不安の解消とリテラシーを補強する高大連携の応用編もある³⁾。

勝野は高大連携を「高校と大学がそれぞれの教育資源を活用しつつ連携協力して行う教育活動の総体」と定義している⁴⁾。高大連携の定義は、狭義⁵⁾ で「高校生を対象として、大学の教育資源を活用して行う高校の教育活動」、広義⁶⁾ では、「高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善充実に資する取組」とされ、本学は広義に基づくものである。本学とA高校は、高校第1学年が各学科専攻から選択して講義を受講し、将来を考える機会づくりにもなるように、連携システムが構築され、その受講に際し、高校の教員が同行している。

筆者は、2年間、看護学科の高大連携授業を担当した。その中で、いきなり専門教育の講義を聴いてもらうのではなく、専門職業人を形成する過程における導入として、相手が何を感じているのかを察知する観察力や、話し方や聴き方からコミュニケーション能力を高める方法として、自己効力感を高め主体的行動変容を示す健康教育プログラムのエクササイズを活用して、まず「感じてもらうこと」を目的に施行した。

今回、講義に参加する高校生は、看護の講義を選択したが、進路は未定で講義に参加している。そのため、職業を意識して受験し、入学後の積み上げの学びを経て職業人に育つ過程の大学生とは違い、スタートラインの動機が低いものとの学生観を描いた。かつ、希望した看護において「観察力」と「コミュニケーション能力」がいかに大切なスキルであるかを感じられる講義となるように、エクササイズの意味を説明した。さらに、自己効力感を高め主体的行動変容を示す健康教育プログラムのエクササイズを用いた理由は、自分自身の自己概念、気質を自覚することが看護を行う上で個人を尊重して関わることに繋がり、お互いが尊重されて良い信頼関係が形成されることを感じる機会にしたいと考えたからである。

高校生の受講の感想や質問紙の記述から、学びと気づき、自己概念・気質について探求し、今後の各授業における活用のあり方を考える。

II. 研究方法

1. 研究対象

2013年の高大連携授業に参加し、看護学科の講義を受講した高校1年生38人、女子65.8% (25/38)、男

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail: chiekok@nayoro.ac.jp

子 34.2% (13/38) と、2014 年高大連携授業に参加し、看護学科講義を受講した高校 1 年生 55 人、女子 70.9% (39/55)、男子 29.1% (16/55) の計 93 人。

2. 講義内容

講義は 90 分、内容は自己効力感を高め主体的行動変容を示す健康教育プログラム (60 分構成) ; 1) グランドルール説明、2) 自己紹介 (導入) イメージエクササイズ、3) 指令、この人を捜せ、4) 私とあなたここが似ているね、5) 私の 4 つの窓、6) 私の大切なものをクレヨンで描き、3 つの形容詞で表現する。自己開示と他者理解、他者と自分を観察し、話をする、待つタイミングを掴み、生徒間の交流で新たな自己発見へ繋げ、意外性から脳 (心) が喜ぶ瞬間を感じてもらい、変化できる・変化する自己の発見に繋げる介入研究である。

アシスタントとして大学生が 2013 年 6 人、2014 年 2 人に協力してもらった。

3. 調査期間

2013 年 10 月 - 2014 年 10 月

4. 調査内容と方法

A 高校第 1 学年の 93 人に、自記式質問紙を用いて調査を行った。調査内容は授業の感想と自己概念⁷⁾とジェンダー・アイデンティティに関する 20 項目 (以後、GI20)⁸⁾、フェイススケール 20 段階⁹⁾ である。

5. 分析方法

分析方法は、統計解析ソフト SPSS Statistics21 を用いて、性別でクロス集計し、Mann-WhitneyU 検定、受講前後でクロス集計し、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。有意水準は $p < 0.05$ 。

6. 倫理的配慮

研究の趣旨、任意性、匿名性を説明し、承諾を得た。データはランダムに番号を割り当て番号処理でデータ管理を行った。

III. 結果

1. 2013 年度の特徴

1) 受講前後と性別における自己概念と GI20 の比較

受講前において男女間で自己概念と GI20 のうち、「性別で厳しく躰けられた」 ($p = 0.003$)、「家族に学校の出来事をよく話す」 ($p = 0.047$)、「暖かいと冷たい」 ($p = 0.027$) の 3 項目で有意な差が認められた。

受講後は、「性別で厳しく躰けられた」 ($p = 0.012$)、「家族に学校の出来事をよく話す」 ($p = 0.004$)、「短気と気長」 ($p = 0.019$) の 3 項目で有意な差が認められた。以下にその詳細を示す。

図 1 は、「性別で厳しく躰けられた」の割合について示した。女子に比べ男子の方が性別で厳しく躰けられたとした割合が有意に高かった ($p = 0.003$) が、受講後 ($p = 0.012$) と有意差は認められるが少し緩和している。

図 2 は、「家族に学校の出来事をよく話す」の割合について示した。男子に比べ女子の方が「家族に学校の出来事をよく話す」とした割合が有意に高かった ($p = 0.047$) が、受講中の振り返りから、その差は増した ($p = 0.004$)。

図 3 は、「短気・気長」の割合について示した。受講前には男女差はなかったが、受講後に男子に比べ女子の方が「やや短気」とした割合が有意に高かった ($p = 0.019$)。これは、1 分間でグループ内でシェアリングすることの心に与えた緊張感によるものと考えられる。

図 4 は、「暖かいと冷たい」の割合について示した。受講前、女子に比べ男子の方が「暖かい」とした割合が有意に高かった ($p = 0.027$) が、受講後には男女差は認められなくなった。大切なもの、好きな人、好きなもの、好きな場所、好きな時間などを思い出すことや他者の思いに触れることで男女差は解消されたと考えられる。

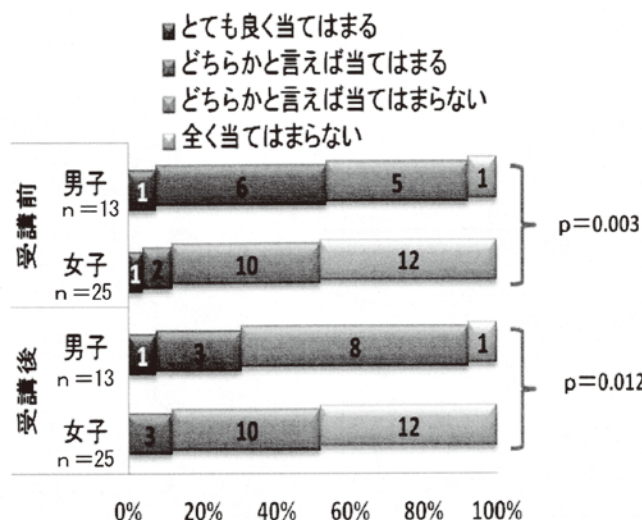


図1 「性別で厳しく躰けられた」の受講前後と性別の比較

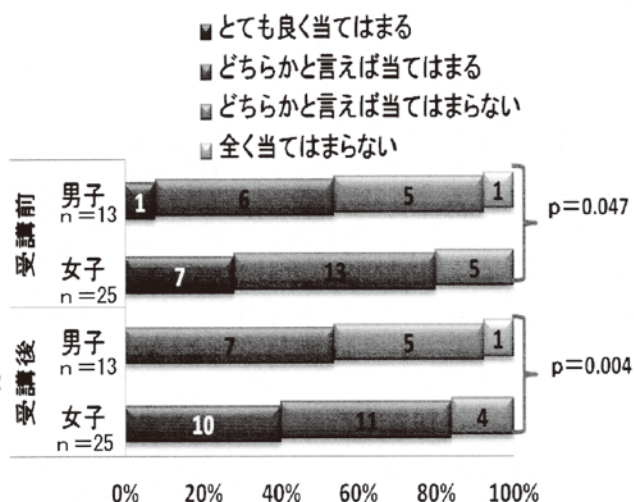


図2 「家族に学校の出来事をよく話す」の受講前後と性別の比較

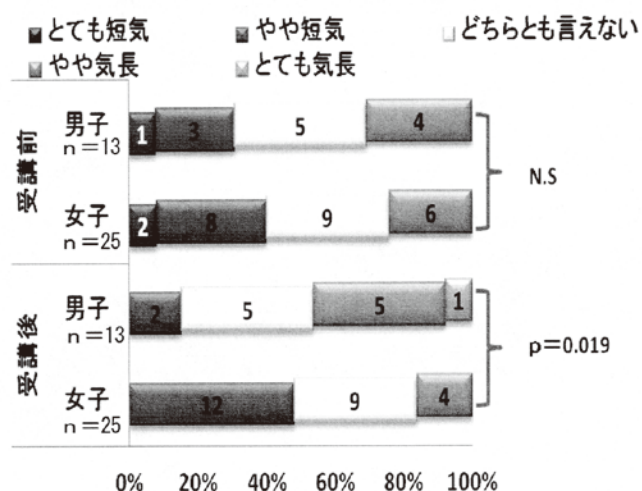


図3 「短気と気長」の受講前後と性別の比較

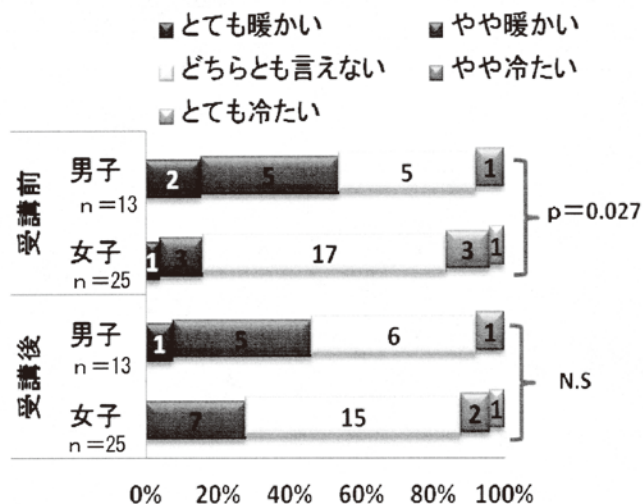


図4 「暖かいと冷たい」の受講前後と性別の比較

2) 受講前後と性差におけるフェイススケールの比較

受講前後の変化では、フェイススケールの変化は認められなかった。以下に詳細を示す。

図5は、受講前後のフェイススケール20段階の変化をみたものである。受講前後で笑顔の割合に変化は認められなかった (Wilcoxon の符号付き順位検定 $p=0.066$, N.S)。また、性差は認められない。

3) 感想の記述 (表1.2)

受講前、男子の記述率は23.1% (3/13)、女子の記述率は8.0% (2/25) といずれも低い。

受講後、男子の記述率は100% (13/13)、女子の記述率は96.0% (24/25) と興味・関心の表れか、高くなった (番号はランダム表示)。

男子の主なコアカテゴリは、【時間が短く感じるくらい楽しく、良い時間】【時間を意識し話すことができる】【他者理解の難しさと感情を理解する力の認識】で、女子の主なコアカテゴリは、【発表や交流が緊張や困難感を超えて楽しい】【時間内で表現する難しさと大切さを知る】【自己理解の時間になる】【自己の変化を自覚】であった (番号はランダム表示)。女子は、受講することで家族に話している事を自覚し、他者との交流と理解が進むことで気長さ、暖かさの面で変化した結果となった。

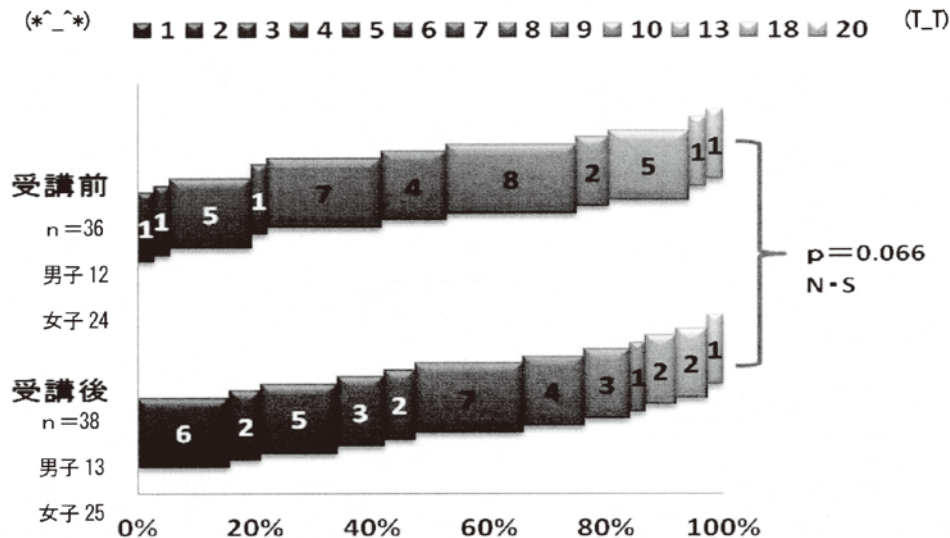


図5 受講前後のフェイススケール 20 段階の変化

表1 受講前の記述

男子記述率 23.1%(3/13)
授業前男子 3人
7) 特にない
9) ないです
10) ない
女子記述率 8.0%(2/25)
授業前女子 2人
20) 友達関係
23) 見た目目で判断するってどういうことかな

表2 受講後の記述 - 1

男子記述率 100.0%(13/13)	サブカテゴリ<10>	カテゴリ<6>	コアカテゴリ【6】
授業後男子 13人 コード「17」			
39) 楽しかったです!			
40) とても楽しかったです!			
41) 楽しかった	楽しかった(6)		
42) 楽しくできてよかったです			
43) とても楽しい授業でした		時間が短く感じるくらい楽しい良い時間でもっと体験したい(9)	時間が短く感じるくらい楽しく、良い時間(9)
46) 楽しかった			
48) 時間が早く過ぎ、もっとやりたかった	時間が早く過ぎたもっとやりたく残念(2)		
44) とても活動が楽しくて時間があっという間に過ぎて残念だった			
51) 楽に行えたのでいい時間を過ごせました	楽に行えた良い時間だった		
49) 1分間の長さを思い知った	1分という時間を体感し知る(2)	1分という時間を意識し体感し話することができる(3)	時間を意識し話することができる(3)
50) 1分間の長さがよくわかった			
47) 1分間のスピーチで1分近く言うことができるようになってよかった	1分話せるようになった		
42) 自分の周りのことについて考えるのが難しかった	周りのことを考えるのは難しい	相手や周りを考える事は難しいが感情を理解する力がついた(2)	他者理解の難しさと感情を理解する力の認識(2)
45) 相手がどういう感情を持っているか少し理解できる力がついたかなと思いたいです	相手の感情を理解する力がついた気がする		
49) 貴重な経験ができてよかった	貴重な経験ができた	貴重な経験ができた	貴重な経験という認識
46) 人前で話すのが苦手で、少し緊張した	話すのが苦手で緊張した	話しは苦手で緊張した	話が苦手で緊張するという自己理解
39) ありがとうございました	ありがとう	感謝	感謝

表3 受講後の記述－2

女子記述率 96.0%(24/25)				
授業後女子 24人 コード「35」	サブカテゴリ<27>	カテゴリ<11>	コアカテゴリ<8>	
52)楽しかった				
53)とても楽しかった				
58)楽しかったです				
62)楽しかったです	楽しかった(7)			
69)楽しかったです				
70) So Fun!				
73)とても楽しかった				
71)楽しい時間を過ごせました！	楽しい時間を過ごせた			
63)楽しいグループだった	グループメンバーが楽しい			
68)発表とか多くてすごい緊張したけど楽しかった！！	緊張したが楽しい	シェアリングの発表や	発表や交流が緊張や	
59)発表を人前でするのすごく嫌いで難しかったけど、こういうエクササイズ楽しかった	人前での発表は嫌いで難しいが、このエクササイズは楽しい	大学生・グループ内の交流が緊張や困難感を	克服して楽しい(16)	発表や交流が緊張や困難感を克服して楽しい(16)
74)色んな人と交流できて楽しかったです	交流できて楽しい			
76)色々な体験をすることができ楽しかったです	色々体験できて楽しい			
61)お話しをすると聞いているだけだと思っていたけどコミュニケーションがとれる内容でとても楽しかったです	講義は受け身と思っていたがコミュニケーションできる内容が楽しい			
57)イメージエクササイズを通して、自分の考えのほかにもたくさんの人の考えを聞くことで考えが広がってとても楽しかったです！！	人の考えを聞き、自分の考えが広がって楽しい			
54)学生さんと仲良くなれて楽しくできた	大学生と仲良くなれて楽しくできた			
75)1分間ってとても長かったです	1分は長い(2)	1分の時間を意識し、	時間内で表現する難し	
76)1分間って長いなあと思いました		ポイントを表現する難	さと大切さを知る(4)	
56)1分って結構大事だなと思った	1分という時間は大事	しさと大切さを知る(4)		
63)1分以内で自己紹介をするのが大変だった	1分の自己紹介が大変だった			
55)これからもっと自分について考えてみようと思いました	自分について考えたい			
62)自分ももっと知らなきゃいけないと思った	自分をもっと知ることが大事	もっと自分のことを考	自己理解の時間にな	
60)今までこういう事をしたことがなかったけど、自分の事を知るよい機会になったのでよかったです	初めての体験だが、自分を知る機会になった	え知りた、知る機	る(4)	
65)好きなものとかを考える時間ができてよかった	自分の好きなもの考える時間ができよい	会・時間になる(4)		
62)もっと社交的になりたい	社交的になりたい	自己の性質として社交的に変化したい		
71)あまり自分を表すことが得意ではないけれど、一言言えれば何かが変わる	自己表現は下手だが表現することで何か変化を感じた	自己表現は苦手だが、少し羞恥心が減るなど変化を感じた(2)	自己の変化を自覚(4)	
72)人前で話すことが苦手だったけど1分間話すことができて、すこし恥ずかしさがなくなった	自己表現は苦手だが、少し羞恥心が減った			
73)この教室に入った時より、温かい気持ちになった気がする	自分の気持ちが温かく変化した	気持ちが温かくなっていく変化を感じた		
56)おもしろかった	おもしろい(2)	おもしろい(2)	発見に伴うおもしろさ	
64)おもしろかった！！			という感情の気づき(3)	
58)いろいろのことをやって、新しい発見が多かったです	新しい発見が多い	新発見が多い		
66)みんなと仲良くなれた	仲良くなる機会になった	色々な人と話、仲良くなる	コミュニケーションと仲	
75)いろいろな人と話しました	色んな人と話せた	なることができた(2)	間作りの機会(2)	
64)絵をたくさんかいた	絵をたくさん描いた	絵を描き自己表出できた	自己開示方法(描画)	
53)とみい・・・クレヨン(笑)	クレヨンという教材に注目(笑)	教材に注目	教材	

2. 2014 年度の特徴

1) 受講前後と性別における自己概念と GI20 の比較

受講前において男女間で自己概念と GI20 のうち、「にぎやかなと静かな」($p=0.001$) の 1 項目で有意な差が認められた。

受講後は、「にぎやかなと静かな」($p=0.001$)、「強いと弱い」($p=0.042$) の 2 項目で有意な差が認められた。以下にその詳細を示す。

図 6 は、「にぎやかなと静かな」の割合について示した。受講前男子に比べ女子の方がにぎやかとした割合が有意に高かった ($p=0.001$)。

図 7 は、「強いと弱い」の割合について示した。受講前は男女で有意な差は認められないが、受講後男子に比べ女子の方が強いとした割合が有意に高かった ($p=0.042$)。

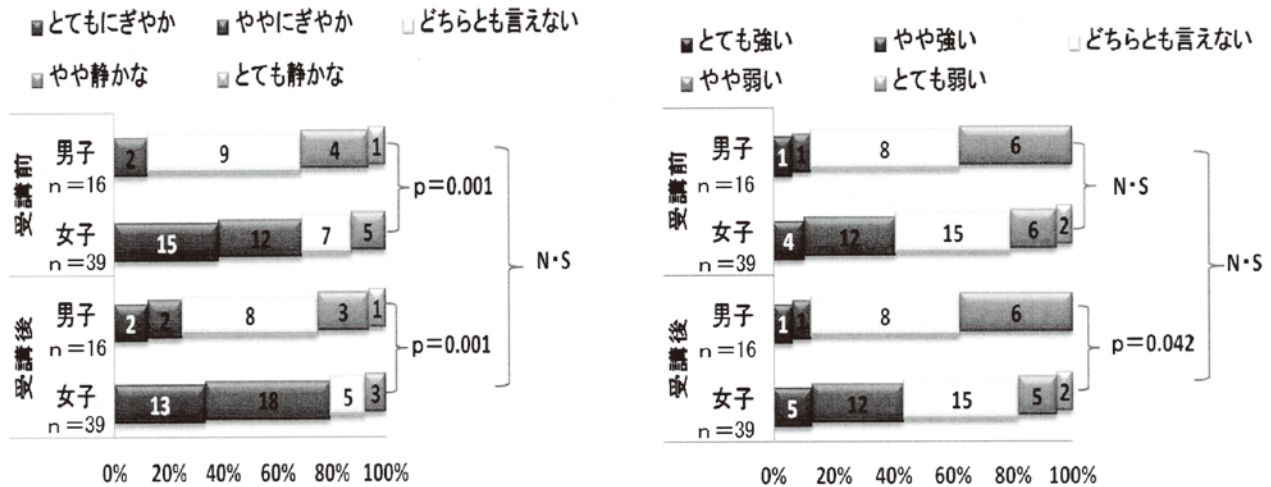


図 6 「にぎやかなと静かな」の受講前後と性別の比較 図 7 「強いと弱い」の受講前後と性別の比較

2) 受講前後と性別におけるフェイススケールの比較

受講前後での変化では、フェイススケールが笑顔へと変化していた。

図 8 は、受講前後のフェイススケール 20 段階の変化を示したものである。受講前に比べ受講後、笑顔の割合が有意に増した (Wilcoxon の符号付き順位検定 0.003)。男女間での差異は認められない。

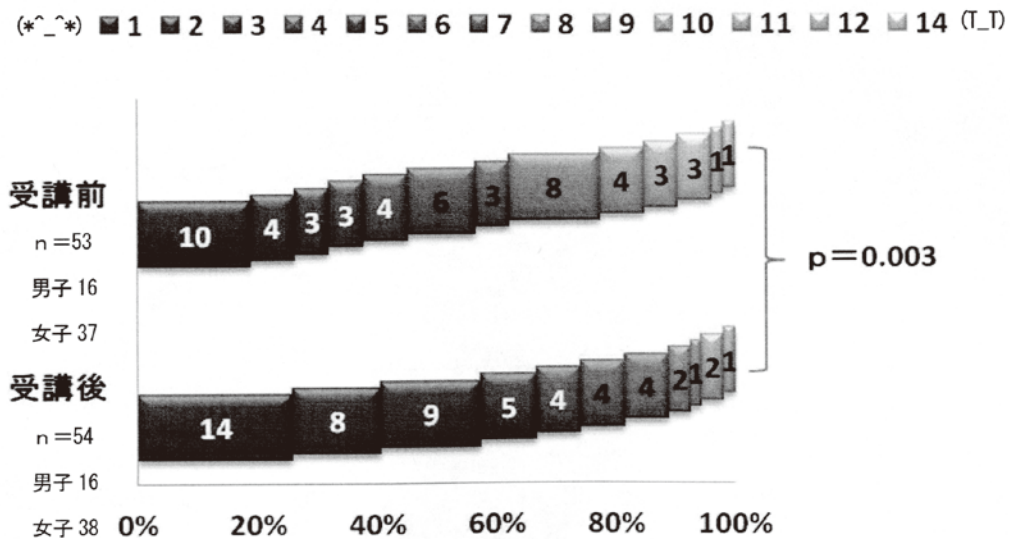


図 8 受講前後、性別によるフェイススケール 20 段階

3) 感想の記述 (表 3. 4)

受講前、男子の記述率は 12.5% (2/16)、女子の記述率は 10.6% (4/39) といずれも低い。受講後、男子の記述率は 87.5% (14/16)、女子の記述率は 84.6% (33/39) と興味・関心の表れか、高くなった。

男子の主なコアカテゴリは、【受講内容の活動がおもしろく、楽しい】【他者理解と共通部分の発見】【自己理解と自己の発見】で、女子の主なコアカテゴリは、【受講内容の活動はおもしろく、うれしい、楽しい、良い】【イメージした受講、導入時の緊張や不安から楽しさへと変化した】であった(番号はランダム表示)。女子は、グループやクラス内での活動により、にぎやかさ、強さの面で性差を強化した結果となった。

表 4 受講前の記述

男子記述率	12.5%(2/16)
6) 人類の行く末	
8) 1秒の定義は誰が決めたのか	
女子記述率	10.6%(4/39)
18) 成績が上がらない	
19) 成績	
20) ドラム	
49) ギター	

表 5 受講後の記述－1

男子記述率87.5%(14/16)			
コード「17」	サブカテゴリ「11」	カテゴリ「6」	コアカテゴリ「4」
60) 楽しくできた			
63) とても楽しかった			
64) いろいろなことをやったけどどれも楽しくできた	楽しく活動できた(6)	楽しく活動できた(6)	
67) 楽しかった			
69) とても楽しかったです!!!!!!!!!!!!			
71) 楽しかった			
56) 項目に当てはまる人を探す活動がとてもおもしろかった	授業内容での活動(Mission...この人を捜せ!)がおもしろい		授業内容の活動がおもしろく、楽しい(12)
58) グループ活動が楽しかった	授業内容の活動が楽しい	授業内容の活動が楽しい、おもしろい(4)	
59) 宝物の形容詞が楽しかった	授業内容(私の大切なもの)の形容詞の表現が楽しい		
62) とても楽しく、ためになるすばらしい授業をありがとうございました	楽しくためになる授業という評価と感謝		
61) 楽しい授業だった	楽しいという授業評価(2)	楽しい授業(2)	
65) とても楽しい授業だった			
56) 共通点を考えると予想以上にあったので驚いた	学生同士の共通点が多く驚く	他学生の中身、共通点を知る(2)	他者理解と共通部分の発見(2)
68) みんなの中身が知れて良かったです	他の学生の中身を知ることができた良かった		
58) 自分について知ることができたと思います	自分について知ることができた	自己の内面を知る(2)	自己理解と自己の発見(2)
70) 自分の知らない自分が見えた...	知らない自分を発見した		
65) 今後の生活に役に立てていききたい	授業内容で得たことを今後の生活で役立てる	将来に役立てる	将来に活用する

表6 受講後の記述-2

女子記述率84.6%(33/39) コード「49」	サブカテゴリ「35」	カテゴリ「17」	コアカテゴリ「10」
73)楽しかった			
74)楽しかった			
75)楽しかった			
84)とても楽しかったです！			
85)楽しかった			
86)とても楽しかったです!!			
89)楽しかったです			
105)楽しかった	楽しかった(14)	楽しく活動できた(14)	
108)すごく楽しかったです			
91)楽しんでできた！			
93)楽しかった！♪♪			
97)とても楽しかったです!!			
103)楽しかったです！			
104)楽しかったし、			
72)おもしろかった	おもしろかった		
84)絵とかで「私は・・・」とかがおもしろかったです。♪	授業内容(私の大切なもの)の絵を描く活動がおもしろい	授業内容の活動が楽しい、おもしろい(3)	
72)絵を描いたりして楽しかった	授業内容(私の大切なもの)の絵を描く活動が楽しい		
82)とても楽しい授業でした!!	楽しい授業であるという評価		
83)楽しく笑顔で受けることができました	楽しく笑顔で授業を受けることができた	楽しい授業(2)	
73)いろんな人とコミュニケーションがとれて良かった	他学生とのコミュニケーションができて良い		授業内容の活動はおもしろく、うれしい、楽しい、良い(31)
87)違うクラスの子と交流ができてうれしかった!!	他のクラスと交流できてうれしい	授業内容の活動で他の学生と交流し、互いを知ることができ、うれしい、楽しい(5)	
96)いろんな人とかがわりがあって楽しかった	様々な人との関わりが楽しい		
100)色んな人のことが知れて良かった。	他の学生の事を知ることができて良い		
105)普段あまり関わらない子とも話せた	普段話さない学生と話せた		
79)グループでの交流があって、おもしろかったです	グループでの交流がおもしろかった		
80)グループでプレゼンしたりするのが楽しかった	授業内容でのグループでのプレゼン活動が楽しい	授業内容の活動でグループ内でのプレゼン交流ができ、おもしろく、楽しい(4)	
95)班の人と交流できて楽しかった！	グループでの交流が楽しかった		
103)グループの人と色々な話ができて良かったです	グループで話ができて良かった		
78)自分の事を話したり、相手の話を聞けて楽しかったです	自分で話す、相手の話を聴くことが楽しかった	授業内容の活動で自分が話し、他者の話を聴くことは楽しい、良い(2)	
79)相手との共通点、自分のことについてなど、相手のことを聞けて良かったです！	学生同士の共通点、自分で話す、相手の話を聴くことができて良かった		
81)とても良い経験になりました	良い経験になった	授業内容の活動は良い経験になった	
76)最初は不安だったけど楽しかったです！	授業初めの不安な感情から楽しさに変化した		
77)難しい事を話されるのかと思っていただけ、とても楽しかった	難しい話や難しい事があるとイメージしていたが意外さと楽しさへと変化した(2)		
88)もっと難しいことをやると思っていたけど、意外に楽しかったです			
78)最後のアンケートはすごく明るい気持ちで書けました	アンケートを書くときの気持ちが、最後は明るい気持ちに変化した	かたい難しい授業イメージと不安・緊張の気分から明るさ、楽しさ、心理面の大事さを感じ気分の変化があった(8)	イメージした授業、導入時の緊張や不安から楽しさへと変化した(8)
87)思っていたよりも楽しい	イメージしていたものと違い楽しく授業を受けることができた(2)		
99)想像していたものとは違い楽しみながら受けることができました			
92)看護ということで、私は注射をしたり、体のことを知ることなどかなあと考えていましたが、心を知ることも看護を学ぶ上で大切なことなんだと知ることができました	看護でイメージした内容と違うが、心理面を知ることの大事さを知る		
102)もっとかたい授業ををすると思い込んでいたら案外わいわい楽しめた	かたい授業をイメージしていたが、わいわい楽しめた		
104)A大に行きたいです	大学に入りたい	進路希望の表明	
73)A大のこといろいろ知れて良かった	大学のことが知れて良い	進路を理解する一つの機会である(2)	進路に関する思考への触発(2)
81)進路の一つとして良い機会になりました	進路を理解する一つの機会となった		
73)〇〇(大学ゼミ生)はかわいい	授業アシスタントの学生に注目	授業の人的環境に注目(2)	授業環境に関する記述(2)
104)先生の声が誰かの女優さんに似ていた	教員の声に注目		
90)自分のことが良く知れて良かったと思う	自分のことを良く知れた	自己の内面を知る	自己理解
85)自分のことも人のことも知ることができた	学生同士、互いを知ることができた	自己理解、他者理解ができた	自己理解と他者理解
101)初めてのことでばかりで、緊張もしたけれど、今までよりも友達のことや色々なことを知ることができました	初め緊張したが、他の学生のことを今までよりも知ることができた	授業内容の活動は、初め緊張したが今までよりも他の学生のことを知ることができた	他者理解の深化
90)コミュニケーション能力が上がった気がする	コミュニケーション能力が向上した	自己のコミュニケーション能力の向上を実感した	コミュニケーション能力の向上
82)看護系のお話も聞いてみたいのです	看護系の話も聴きたい	授業内容の要望	授業内容の要望
98)ないです	感想なし	感想なし	感想なし

IV. 考察

1. 高校生の学びと気づき

1) 大学生アシスタントがいることの強み

高校生は大学生が授業に関わることで、教員との関係性を感じ、入学後の未来の自分をイメージし、「このくらい主体的に動くことができる」というおおよその身近な目標を感じてもらうことができる。これは、健康教育におけるスモールステップの一段階であると考ええる。

2) 講義内容をエクササイズ中心にした理由

大学で行っている専門領域の内容をいきなり伝えるのではなく、看護に必要な観察力やコミュニケーション能力をエクササイズの中で引き出し、いつも行っている自分の力を感じて、自覚できる点に主眼を置き、構成を動きのあるもの、さらに、自覚しない自己との対面で最後を締めくくった。心のゆらぎや個別性、他者が何に重きを置いて生きているのかを、同じ出身校の同級生でも、普段の会話の内容は一側面にすぎないことに気づく時、他者理解が深まる。看護をするにあたって一番大切なのは、いかに相手に興味・関心を持って、観察力と適切な技術と知識で対象の健康を支えていくことができるのかということである。思っている、表現しなくては伝わらない。表現の仕方と相手に与える印象が悪ければ信頼関係は生まれない。自己開示、自己表現を「辛い状況にある対象」にどう伝えたらいいのか。1分という表現時間を区切っているのは、初めて話を展開するのに1分の時間を意識し、ポイントを掴み伝えることに繋がると考えるからである。伝えたいことはまず伝えた上で、限られた残りの時間でその説明を伝えられるかである。グループ内のコミュニケーションで一番困る事は、ひとりが発言を独占してしまうことである。グループ内外のコミュニケーションを進展させるために、筆者は短いと感じるかも知れないが、ストップウォッチを準備し、時間を意識できるようにグループワークに用いている。ここで、生徒は1分で伝えられることが意外に多いことに気づく。また、伝えることが苦手な場合も、まず、短い時間での発言が人に伝えるスモールステップの機会となる。話すことができた、伝わったという思いは、何かしらできたという達成感、自己効力感に繋がる。エクササイズの一つひとつが、看護の観察力とコミュニケーションのどこにあたるのかを意味づけて説明することで、この講義の構成の意味を感じて参加してもらうことができる。大島¹⁰⁾は「相手の時間を大切に、タイムマネジメントを強く意識することがプレゼンターに求められ、与えられた時間を過不足無く使い切るのが良いプレゼンターの条件である」と述べている。このような機会をくりかえし設ける事は重要である。

受講前後で笑顔の傾向が単年で認められ、記述からも、楽しい時間を過ごし、人の話を聞く、人に話を聞いてもらう経験を通して、自己開示、他者理解が深化したと考える。

2. 高校生の自己概念・気質・GI20

1) 性差

2013年は受講前、男子は「男だからと厳しくしつけられた」という思いが強く、暖かい気質という特徴があった。受講後も同様に差はあるが、大切なもの、好きな人、もの、場所、時間などを振り返ることで緩和し、暖かな気質は性差を解消するという特徴を示していた。女子は、家族に学校のことをよく話し、日常を振り返り、よく話していることを自覚し、強化した結果となっていた。また、受講後に「やや短気」に変化するという特徴を示した。

2014年は受講前、女子は「にぎやか」という状態を認識しており、受講後も同様であった。受講後、にぎやかに加え、「強さ」で有意な差が生じたことから、大切なもの、好きな人、もの、場所、時間などを振り返ることと短時間ではあるが他者との交流から強さを認識したものと考えられた。

今回の調査で特徴的なのは、通常ジェンダーに関わる要因で「性別に対する肯定感は男子の方が高く、女子の方が低い」という結果が認められないということである。現在まで、他の高校・中学・小学での調査で認めた結果が出ない理由は、看護学科を目指している（選んだ）ことが影響しているのかは不明であるが、

2013・2014年と2年にわたり共通した結果であった。今後、例数を増やし、確認していきたいと考える。

性差で変化の生じた項目の特徴から、2013年は男子に対しては家族に話す機会に繋げ、女子に対してはやや短気という気質が強化されたが、暖かさが増した。また、2014年は、女子はにぎやかで活発さを増し、受講後に強さも増した。その背景には、グランドルールで守られた環境で話す時、受け入れられたと感じる心地よさから、自己開示と他者理解ができる交流を通じて、自分の発言を聞いてもらえた経験から自信に繋がり、強さが強化されたものと考え。さらに、他者との違いを感じて、視野が広がる経験から他者理解が強化されたと考える。生徒は他者と自己を観察し、他者理解と自己理解を体験し、適切な自己開示が関係性を促すことを学び、自己の気分や思いの変化に気づくことができていた。

2) 受講前後の比較

2014年の受講前後の比較で、気分が笑顔に変化した。自由記述にもあるように「楽しい時間」であったこと、意外な発見に伴う喜びから変化したものと考え。

今後、一部、受講前から気分が2013年「20」、2014年「13」とすぐれない者がおり、生徒の心を支える取り組みは継続して必要と考える。安心が保障された中での仲間教育の機会を増やすなど、継続した体制づくりと各授業におけるエクササイズを効果的に活用する必要がある。

3) 高校生の学びの構造

高大連携教育の本プログラムは、(1)観察力・コミュニケーション能力を育成する、(2)自己概念、気質が変化するという2段階構造である。(1)は、高校生の感想に、このプログラムの1分間スピーチやグループワークを通して、観察力・コミュニケーション能力に通じる気づきの記述があることから、看護の導入として有効な教育方法であると考えられる。(2)は、2013年は4項目に、2014年では2項目で有意な差が認められたが、2年共通した有意差を認める項目はなく、クラスカラーや学年毎の変化や気質に繋がる家庭の影響が大きいことがわかる。また、受講前後の変化も2014年にフェイススケールが笑顔に変化した。この60分のプログラムでは、自己概念、気質を変化するまでには至らなかった。荒木¹¹⁾は、目標達成を目指す授業からの「脱却」で、生徒の声を受け止め、応じて、授業を動かし、生徒の言葉を丁寧に拾うところから見える授業者の気づきを何よりも重視し、目的、結果よりもプロセスを大事にして、授業で見え隠れする生徒の「本音」を受け止めることで主体的な関わりへの意欲を引き出した実践を報告している。

本研究では、高大連携教育で、(1)では、感想の記述の分析から観察力・コミュニケーション能力育成の働きかけを確認でき、(2)では、自己概念、気質に関して共通した有意差は認められず、さらに継続的な教育を実践していくことが必要である。

V. 結論

1. 自己効力感を高め主体的行動変容を示す健康教育プログラムを活用した高大連携授業は、グループワークで他者を多面的に理解し、1分間スピーチでポイントを伝えることの大事さを生徒が認識できたことから、看護の観察力・コミュニケーション能力の育成に関する導入として有効な教育方法である。
2. 高大連携授業で、自己概念、気質に関して共通した有意差は認められず、さらに継続的な教育を実践していくことが必要である。

おわりに

高大連携授業で高校生の学びと気づき、自己概念、気質、フェイススケールの変化について述べた。

高大連携授業に御参加いただきました高校生、引率された教員の皆様、アシスタント大学生の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 諸星裕：消える大学残る大学、集英社、p215、2008.7.
- 2) 棕本洋：高大連携と能力形成、高崎経済大学産業研究所編日本経済評論社、pp37－41、2013.
- 3) 長岡裕子：「高校教養科」設立の提唱－「小論文」を手法とする高大連携教育をめざして－、全国大学国語教育学会発表要旨集、第一学習社、 pp109－110、2013.10.
- 4) 勝間頼彦：「高大連携とは何か」、学事出版、p68、2004.
- 5) 4)同上書、p69
- 6) 4)同上書、p71
- 7) 長島貞夫、藤原喜悦、原野広太郎、斎藤耕二、堀洋道：自我と適応の関係についての研究(2)、－Self-Differential の作成－、59－67、1996.
- 8) 土肥伊都子：ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成、教育心理学研究、44(2)、62－69、1996.
- 9) Lorish CD、 Maisiak R: The face scale: a brief, nonverbal method for assessing patient mood, Arthritis Rheumatism 29: pp906-909, 1986.
- 10) 山形大学基盤教育院、大島武：なせば成る！スタートアップセミナー学修マニュアル改訂版、山形大学出版会、p31、2013.
- 11) 大学生の主体性を引き出す授業実践編集委員会、荒木奈美：大学生の主体性を引き出す授業実践－自らの生き方を問い直す初年次教育、FD ネットワーク “つばさ” プロジェクト pp47－54、2014.